

廃校を活用した「地域交流・高齢者福祉複合施設ひだまりの里」の空間構成と利用形態

—山口県阿武町における高齢者福祉施設のネットワーク構築に関する研究 その5—

高齢者福祉複合施設 廃校活用 利用形態

正会員 ○三島 幸子*
 正会員 中川 麻衣**
 正会員 中園 真人***
 正会員 山本 幸子****

1. 序論

過疎地域の自治体においては、地域の人口減少と高齢化の同時進行により、高齢者の暮らしを支援する医療福祉需要増大への対応と、厳しい財政事情のもとでのサービス水準の維持向上という困難な課題を抱えていることから、最近では既存施設や民家等を活用した通所介護施設の整備が進んでいる。

過疎地域では少子化も進んでいることから、廃校が増加傾向にある。一方で、高齢者の福祉サービス需要は今後も増加すると考えられることから廃校を高齢者施設として活用することは有効であると展望される。

関連する既往研究はもともと廃校に関する研究は少ないものの、廃校が発生する原因と課題に関する研究や、廃校を有効活用している事例研究、廃校を他の建物へ転用するプロセスに関する研究、建物を転用する際に法律から見た問題点を分析した研究を行なったものなどがある。また、廃校を高齢者福祉施設へ活用する研究については住民主体で高齢者福祉施設へ転用する事例研究があるが、廃校を活用した高齢者福祉施設を対象に、施設の空間機能構成と使われ方の関連分析からその有効性を検討した研究は少ない。

そこで本研究では高齢者福祉施設整備の先進事例として注目されている阿武町^{注1)}の地域交流・高齢者福祉複合施設「ひだまりの里」を対象に、使われ方の分析をもとに、廃校を高齢者福祉施設へ活用する有効性と課題について考察する。

調査は第一に「ひだまりの里」の整備プロセスに関するヒアリング調査、介護予防の運営に関する社会福祉協議会へのヒアリング調査^{注2)}、建築概要に関する資料収集及び実測調査（地図・建築図面収集、敷地周辺及び施設平面の実測調査・写真撮影）^{注3)}を実施した。第二に施設利用登録者データの収集^{注4)}と各部門の使われ方調査を行った。

2. ひだまりの里の整備プロセス

2.1 阿武町における福祉施設整備プロセス

1997年の介護保険法制定を契機に、制度導入に向け既存老人ホーム(1961 建設)の建て替えを中心とする本格的な福祉拠点施設整備計画が策定された。1998年以降介護老人ホーム「清光苑」、デイサービスセンター、在宅介護

支援センター、特別養護老人ホーム「恵寿苑」及びグループホーム「であい」が新設され、阿武町のみでなく周辺地域をも含めた広域的な高齢者福祉拠点としての役割を担うに至っている。

これらの施設の一体的な運用を促進するため、社会福祉協議会とは独立して新たな運営組織「社会福祉法人阿武福祉会」が設立され(2000)、町の高齢者福祉を担う法人組織として位置付けられた。

広域基幹施設の整備が完了した後、阿武福祉会では民家を活用した小規模施設整備の取り組みを開始し、2006年に福賀地区に「えんがわ」を開設した。その後2008年に宇田地区に「ひだまり」を、奈古地区に「田中さん家」を相次いで開設し、合併前の旧3町村全ての地区に施設が整備された。その後、宇田小学校が廃校したことから、2008年にひだまりの里に移行した。

2.2 ひだまりの里の整備プロセス

2009年3月に宇田小学校が廃校になりその後、地域住民と町で議論され、小学校を残す要望が強く2009年10月に町からの要望で計画が始動した。議論の中では体験施設や民宿などの要望もあったが、最も多かった高齢者福祉施設として活用するに至った。グループホームは奈古に「であい」があるが希望者が多く不足しており、デイサービスセンターは宇田に民家を改修した「ひだまり」が開設されていたものの、狭いという声が多かったため複合施設として開設されることとなった。また、福賀地区では冬期雪が多く高齢者にとって不安の種だったため、冬期の間の一時避難場所として生活支援ハウスが機能として追加されることとなった。

2.3 施設の空間構成と主要な機能

施設の中で主要となるグループホームは教室であった場所を改修し、利用者が1日を快適に過ごせるよう配慮している。また、地域との交流を考え、グループホームの空間の一部に談話室を設け、ひだまりの里の利用者や地域の人が利用できる喫茶室や地域の展示の場として利用できるように計画されている。

デイサービスは別に出入口を設け、機能訓練室2部屋とトイレ、浴室、静養室を廊下と挟んで配置し移動距離が短くなるよう計画されている。その隣には生活支援ハウスが4部屋並んでおり、別にトイレや共同キッチンが配置され独立して生活が送れるよう計画されている。

The space configuration and the use patterns of the Renovation of the abolished school 'Local Exchange and Elderly Welfare Complex Facility, HIDAMARI-NO-SATO'
 Network Construction of Welfare Facilities for Old People in Abu Town Yamaguchi Prefecture (Part 5)

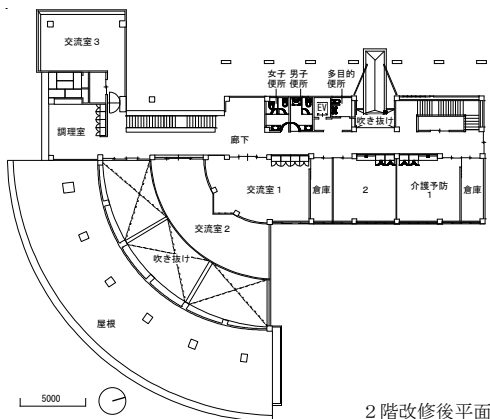
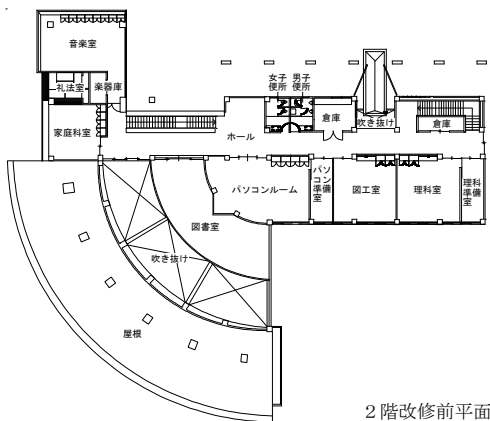
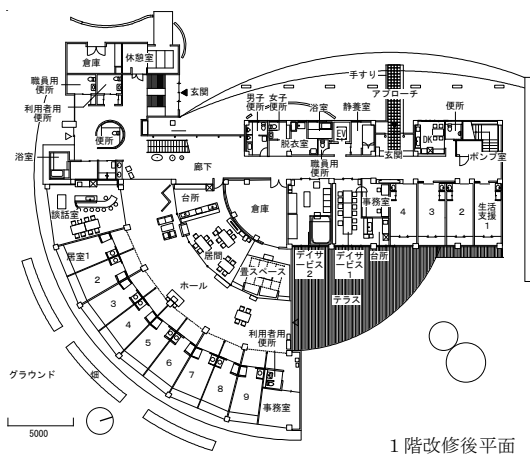
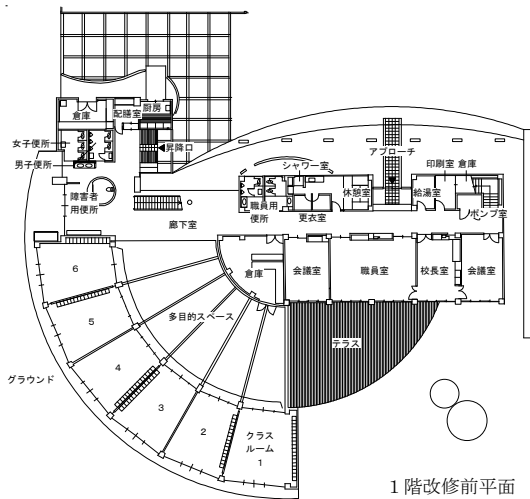


図1 改修前、改修後平面図



また、既存のテラスをグループホームからもデイサービスから行きできるように考えられている。

もともとひだまりで行われていた介護予防には、2階の理科室の利用が計画された。現在は「元気クラブ」の部屋として利用されている。その他の機能については未定であったため、交流室として位置づけられた。

2.4 改修内容

グループホームにするために教室の中央に壁を建てて2居室に区分し、教室前の多目的スペースには建具が新設され、居間や畳の空間としている。また、子供用トイレを一般のトイレへ交換、多目的トイレへの改修が行われている。また、デイサービス、生活支援ハウスにするために、管理部門では壁の位置を変更している。また、多目的トイレ、浴室、台所、エレベーター、手すりの新設を行なっている。2階も子供用トイレの交換や、多目的トイレの新設、手すりの設置を行なっているが、平面的な変更は特にない。

グループホーム、生活支援ハウスは24時間体制のため、スプリンクラーが必要であることから、改修費1億4000万円の約半分を占めている。宇田小学校を建設した業者による改修が行われ、2010年4月にひだまりの里が開設された。4月にグループホーム、6月にデイサービス、11月に生活支援ハウスが開始された。

3. 複合施設各部門の運営概要

3.1 グループホーム

グループホームは定員9名で全ての部屋が埋まっている。過去に2名の利用者が入れ替わっている。現在も50名近くが待ちの状態になっている。スタッフはアルバイト、非常勤を含めて10名いる。スタッフは1名のアルバイト、非常勤、常勤1名を除く7名で早番、日勤、遅番、夜勤に分かれてローテーションで回している。1日平均5名のスタッフで行なっており、夜勤の人は次の2日間休日を取れるようにしている。

基本的なプログラムは朝食、昼食、夕食のみ決まっており、それ以外の時間は利用者は自由に過ごしている。スタッフは夜間を含めた利用者の1日の生活介助、調理、事務作業を行なっている。

3.2 デイサービス部門

デイサービスは休日が土曜日で9:00~16:00に営業している。スタッフは4名で、1日3名のスタッフで行なっている。

図2にデイサービスが開設してからの利用者の推移を

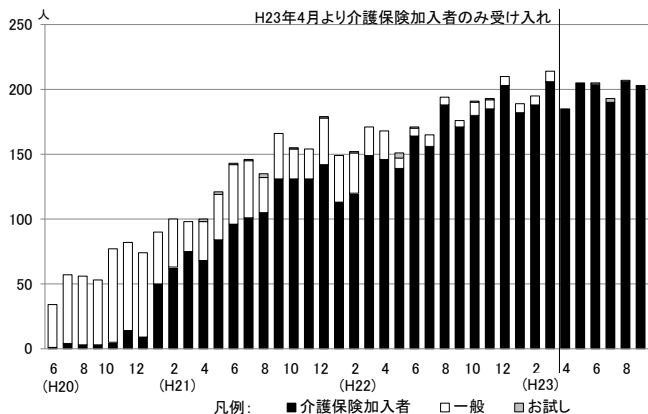


図2 デイサービス部門の利用者の推移

表1 生活支援ハウスの利用者の属性

性別	居住地	利用理由	利用開始時期	利用期間	移動方法	家族構成
M87	惣郷	妻の入院	H23.6、10	30日(各)	自立歩行	夫婦のみ
F78	奈古	夫の死亡	H23.3	30日	車椅子	単身
M76	宇生賀	冬期の一時入所	H23.1	30日	杖	単身
F89	福田	退院後の一時入所 冬期の一時入所	H22.11	120日	自立歩行杖	単身
F82	福田	退院後の一時入所 冬期の一時入所	H22.11	120日	自立歩行杖	単身
F84	宇田	退院後の一時入所 冬期の一時入所	H22.11	120日	車椅子 手引き歩行	単身

表2 介護予防の運営

	奈古1	奈古2	宇田	福賀
開催する曜日	第1, 3木曜日	第2, 4木曜日	第1, 3火曜日	第2, 4火曜日
時間	9:00~12:00	9:00~12:00	9:00~12:00	9:00~12:00
開催拠点	母子健康センター	母子健康センター	ひだまりの里	福賀支所
建物の形式	木造	木造	RC造	RC造
参加人数(定員)	8名(10名)	5名(10名)	8名(10名)	19名(10名)
利用者内訳	奈古8	奈古5	宇田7、惣郷1	福賀14、宇生賀5
ボランティア人数	2名	2名	2名	2名
活動内容	体操・個人面談・レクリエーション・体力チェック(年3回)・口腔ケア・フットケア			
行事(各地区)	花見(4月)・七夕(7月)・素麺流し(8月)・運動会(10月)・紅葉見学(11月)			
行事(全体)	クリスマス会・忘年会(12月)			

*1個人面談・・・血圧測定、体の調子を聞く等
*2体力チェック・・・握力、5m徒歩、片足立ち等
*3行事(全体)は奈古の町民センターで行っている

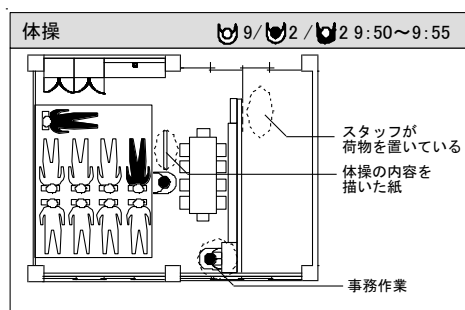


図3 介護予防部門の平面図

示す。開設当初は介護保険非加入のお試しの利用者がほとんどであった。その後、スタッフの呼び込みやケアマネージャーの勧めもあり介護保険加入の利用者が増え、平成22年12月には初めて介護保険加入の月間利用者が200名を超えた。その後利用者が増えたこともあり、平成23年4月に介護保険非加入者の受け入れを止め現在に至る。宇田や惣郷など施設近辺の利用者が多い。



写真2 廊下



写真3 生活支援ハウス



写真4 介護予防部門



写真5 談話室

表3 婦人会の活動内容

	日付	時間	場所	参加人数	内容
第1回	H23.6.28	13:00~	談話室	約20名	・感知テスト&Qシート ・認知症とは ・4大認知症とは ・認知症の原因について
第2回	H23.7.28	13:30~	談話室	約20名	・認知症の疑似体験 ・認知症のケアのポイントについて
第3回	H23.8.25	13:30~	談話室	約20名	・第1, 2回の振り返り ・アルツハイマーについて
第4回	H23.9.30	13:30~	談話室	約20名	・第1~3回の振り返り ・演習(10年後もし認知症になったら)
第5回	H23.10.28	13:30~	居間	約30名	・グループホームの入居者との交流 ・ビンゴゲーム ・お手玉回し ・口の体操 ・おやつを食べながらお話
第6回	H23.12.19	13:30~	ホール	44名	・クリスマス会 ・コーラスの先生の指導で合唱・演奏 ・婦人会手作りのケーキを食べる

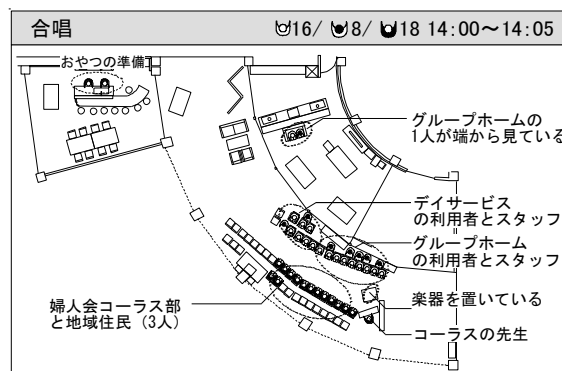


図4 婦人会のクリスマス会の様子

3.3 生活支援ハウス

生活支援ハウスはグループホームのスタッフが兼任で担当している。表1に利用者の属性を示す。過去に6人利用しており、利用理由は冬期の一時入所の利用が最も多く、家族構成は単身の方が主に利用している。利用期間は1ヶ月を基本としている。グループホームの調査中

に1名利用していたが、1名のみのために生活支援ハウスとの行き来が大変なことから、グループホーム部門の職員休憩室を居室として使用していた。

3.4 介護予防部門

介護予防の運営の詳細を表1、一場面の様子を図3に示す。もともとは町が阿部福祉会に依頼して行われていたが、現在は阿部社会福祉協議会が町に委託されて行なっている。利用者の選定は各家庭にチェックシートを送付し回答してもらい、チェック項目が一定以上に至った高齢者を訪問して行っている。町との話し合いで以前は宇田の1拠点だけだったが、現在は奈古、宇田、福賀の3拠点で行われている。また、奈古は利用者が多いため、2回に分けて行われている。福賀も参加人数が多いが、2回に分けて行う計画はまだない。

また、介護予防のスタッフは2人とサブが各地区1名ずつのみのため、ボランティアを募集し各2名ずつ付いている。目的は負担を減らすことの他にボランティアをすることによって、介護予防につながることを期待している。内容は全身を使った体操、個人面談、簡単なレクリエーションが中心で、季節によって花見などのイベントも行なっている。体操やレクリエーションはボランティアも一緒に参加している。時間は基本的には午前中のみだが、利用者から昼食も準備して欲しいと要望もあるもののまだ実現には至っていない。

3.5 婦人会の活動

地域交流の1例として婦人会の活動が挙げられる。ひだまりの里が開設後、認知症の誤った認識を無くするという動きから、婦人会で認知症の月1回の勉強会が開始された。

婦人会は阿武町に住む主婦がほとんど参加している団体でグループホームのスタッフの中でも所属している人がおり、規模は大きい。

勉強会は全5回で、第6回目のクリスマス会は今後の交流の第1歩として開催された。第1~4回は学習で認知症について、対処法について学び最後の第5回で実際にグループホームの利用者と交流している。居間で行われ、一緒にゲームしたりおやつを食べたりしている。クリスマス会では婦人会やグループホームの利用者だけでなく、デイサービスの利用者や地域住民数人も参加し、大規模なものになっている。その様子を図4に示す。婦人会の勉強会は終了したが、今後も交流は続くと考えられる。

6. 結論

1) 地域住民の意向で高齢者福祉施設になった例で、複合施設とすることで、グループホームの待機高齢者の問題やデイサービス施設の狭さの問題等を解決することが

出来ている。また、地域交流として談話室も計画され、婦人会など新たな交流が生まれている。

2) 改修計画は建設して年月が経っていないこともあり、子供用の便所の取り替えや、教室を2居室に区分するなど大規模な改修は行われていない。一方でスプリングラに費用を要している。

3) グループホーム、デイサービス、生活支援ハウス、介護予防と必要な機能はそれぞれコンパクトにまとめられているが、グループホームと生活支援ハウスはスタッフが兼任で行なっているため、離れた空間を行き来する必要があるなど問題もある。

注釈

注1) 2008年時点における山口県下20自治体の高齢者デイサービス充足度(デイサービス定員/65歳以上高齢者人口×1000)は、県平均は24.4人/千人であるが、阿武町の充足度は37.6人/千人と県下の自治体の中では最も高く、山口県における先進地域として位置付けられる。

注2) 2012年1月17日に市役所及び社会福祉協議会の担当者にヒアリング調査を行なった。

注3) 図面に関しては市役所から図面1式をお借りし、それをもとに作成している。詳細な家具配置については使われ方調査期間中に行なった。

注4) 施設利用登録者データ及び使われ方調査はデイサービス:2011年9月18日-9月24日、グループホーム:2011年10月24日-10月30日、介護予防:2011年10月18日、12月6日である。

参考文献

- 1) 鈴木健二、友清貴和:住民主体による廃校から高齢者施設への転用に関する事例的考察, 日本建築学会計画系論文集, No. 607, pp. 17-24, 2006. 9
- 2) 吉原昌也, 御手洗政和:住民主体による廃校から高齢者福祉施設への転用プロセスに関する研究 その1-地域の概要と離島の現状について-, 日本建築学会学術講演梗概集, pp. 377-378, 2005. 9
- 3) 吉原昌也, 御手洗政和:住民主体による廃校から高齢者福祉施設への転用プロセスに関する研究 その2-改修に至る転用プロセスについて-, 日本建築学会学術講演梗概集, pp. 379-380, 2005. 9
- 4) 能勢温:京都市における小学校跡地利用計画策定プロセスに関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No626, pp. 913-918, 2008. 4
- 5) 永井史紀, 土久菜穂, 山本明:廃校後用途変更に関する研究~1966年以降の事例についての実態把握とその要因分析~, 日本建築学会学術講演梗概集, pp. 355-356, 2006. 9

謝辞

本研究を進めるにあたり、社会福祉協議会の担当者及びスタッフの方々には、度重なる調査にご協力いただいた。また市役所の担当者にもヒアリング調査にご協力いただいた。末尾ながら記して謝意を表します。

* 山口大学大学院理工学研究科 修士

** 山口大学工学部感性デザイン工学科 学部生

*** 山口大学大学院理工学研究科 教授・工博

**** 山口大学大学院理工学研究科 助教・博士(工学)

* Graduate student, Yamaguchi Univ.

** Undergraduate, Dep. of KANSEI Design Eng., Faculty of Eng., Yamaguchi Univ.

*** Professor, Yamaguchi Univ., Dr.Eng

**** Assistant Professors, Yamaguchi Univ., Dr.Eng.